

第7節 「純粋無業者」の特徴

ここまでは、主にタイプと性別を軸としつつ、無業者の経歴と現状を検討してきた。また前節では、現在の活動内容別にそれぞれがどのような人々であるかを詳しく検討した。前節で注目されるのは、無業者の中でまったく不活発な人々、すなわち現在の活動内容として「特に何もしていない」と答えた者は30名であり、無業者全体の19.1%、「求職型」以外の無業者の33.3%にすぎないということである。「自立調査」サンプル全体を母集団とすると「特に何もしていない」無業者は0.7%となる。

この「特に何もしていない」無業者を仮に「純粋無業者」と呼ぶことにすると、その比率は相当に小さく、無業者の中には「純粋無業者」以外に失業者、浪人や資格取得準備、家業手伝い、療養、結婚準備など何らかの活動に従事していたり個別の特殊な事情を持つ者が多数含まれているといえる。それゆえ、無業者、中でも「非求職型」や「非希望型」を一括りにして問題視することには慎重でなければならない。

しかし、無業者の中で「純粋無業者」を区別することによって新たに浮かび上がるのは、次の2つの事実である。その1つは、「純粋無業者」という極めて不活発な層が、量的には少ないとはいえ確かに存在しており、彼らは低学歴、親との離死別、不登校、中退、就労経験がないこと、長期の無業期間、暮らし向きのゆとりのなさなど、「不利」な履歴を経験している者の比率が、無業者の中でも特に高いということである（表3-1-9）。こうしたいわば「負の連鎖」に巻き込まれている若者に対して、早い段階から公的な支援が、彼らにスティグマを付与しないことへの十分な配慮とともに提供される必要がある。

また注意を要するもう1つの点は、「純粋無業者」以外の、何らかの活動に従事している無業者に観察される不安要素である。たとえば、無業者の中で「進学・留学準備」をしている者の60.0%、「資格取得準備」をしている者の58.3%、そして「趣味・娯楽」及び「芸能・芸術のプロになるための勉強」をしている者はそれぞれ100.0%が、そうした活動を「ひとりで」行っている。これらの活動を「ひとりで」行っていることが必ずしも問題であるとはいえないとしても、彼らが体系的な学習支援や活動ネットワークに組み込まれていないことは確かである。何らかの活動に「ひとりで」従事している無業者は、その活動に対する本人の意欲が薄れた場合、容易に「純粋無業者」へと転化しうる。このような懸念は、「純粋無業者」の中には高校卒業直後に進学準備をしていたがその後「純粋無業者」となった者が含まれていることなどからも裏付けられる。それゆえ、「純粋無業者」とそれ以外の無業者との間の境界は相当に弱いものであると考えざるをえない。

このように、「純粋無業者」とそれ以外の無業者は、それぞれに固有のリスクを抱えており、その各々に適合した対処策を必要としているといえる。

表3-1-9 「純粋無業者」の特徴

	「純粋無業者」	無業者全体	サンプル全体	
高卒以下	77%	61%	46%	*
親離死別	33%	21%	12%	
1カ月以上不登校	17%	9%	3%	
中退	30%	16%	6%	*
就労経験なし	40%	20%	2%	*
無業期間2年以上	50%	29%		
暮らし向きにゆとり	47%	50%	57%	

注) *印は非在学者サンプル全体。

第8節 まとめ

本章では、「自立調査」の独身無業者サンプル157名の経歴と現状について、主に無業者内部の3つのタイプと性別による違いに留意しつつ検討を加えてきた。タイプ別の相違はかなり明確であり、就労に対して積極的な「求職型」、それとは対照的に就労に対して消極的な「非希望型」、その中間に位置する「非求職型」、という特徴が観察された。経歴面でも、「非希望型」、特にその中の男性には、学歴面や就労経験、無業期間などに関して就労への意欲や可能性を阻害する諸条件が相当に集中していることが明らかになった。他方で、就労への積極性を保持している「求職型」でも、たとえば学力や学歴の問題や正社員経験の少なさ、年齢の高さ、あるいは暮らし向きなどの点では、困難を抱えていないわけではない。それは、就労への障害に関する彼ら自身の認識にも反映されている。

無業者の現在の活動内容を詳しく見ると、「特に何もしていない」者すなわち「純粋無業者」は一部にすぎず、それ以外の無業者は多様な活動に従事しており、まったく不活発な状態であるとはいえない。しかし、「純粋無業者」における不利な諸条件の集中、及びそれ以外の無業者が「純粋無業者」に転化する可能性という点では、それぞれに固有の課題が見出される。

こうした個々の無業者のリアルな実態を把握した上で、それぞれに適した支援策が講じられる必要がある。